

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00114

研究課題名（和文）16-18世紀インドにおける存在一性論の継承についての実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on the Doctrine of the Unity of Being in 16th-18th Century India

研究代表者

石田 友梨 (Ishida, Yuri)

岡山大学・社会文化科学学域・特任准教授

研究者番号：60734316

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、16-18世紀インドにおける存在一性論の継承を実証するために、伝記資料から師弟関係を調査した。これまで行ってきた研究では、伝記資料で師弟関係や親子関係があることが認められる場合にも、著作では思想の継承が見出せない場合があった。思想家の著作から思想の継承を考察するだけでなく、伝記から裏付けられる師弟関係にも着目することで、より実態に近い継承の姿を明らかにすることを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

最も大きな意義のひとつとして、情報学的手法を用いたイスラーム研究の基本的手法を確立したことが挙げられる。本研究では師弟関係や移動経路の可視化や、人文学資料データの世界標準であるTEI (Text Encoding Initiative) に沿ったアラビア文字を含むテキストデータの構築に取り組んだ。本研究の成果は他のイスラーム研究にも応用可能である。また、欧米中心のデジタルヒューマニティーズに多様性をもたらす点でも貢献した。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the master-disciple relationship from biographical materials to demonstrate the inheritance of the doctrine of the unity of being in 16th-18th century India. In previous studies, although biographical materials showed the existence of a master-disciple relationship or a parent-child relationship, there were cases in which the succession of ideas could not be found in the writings. In addition to considering the succession of thought from the writings of Muslim scholars, this study aimed to provide a more accurate representation of the transmission of ideas by focusing on the master-disciple relationship supported by biographies.

研究分野：イスラーム思想史

キーワード：イスラーム 思想史 インド 存在一性論 デジタルヒューマニティーズ 人文情報学

1. 研究開始当初の背景

イブン・アラビーが唱えた存在一性論は、神の自己顕現によって万物が生じると説くものであり、イスラーム神秘主義を代表する思想である。しかし、イブン・アラビー自身の著作が難解であることから、存在一性論はイブン・アラビーの著作の注釈書を通じて広がっていったとされている。本研究の対象であるインドにおいても、イブン・アラビー自身の著作ではなく、その注釈書の影響が大きかった (William C. Chittick, "Note on Ibn al- 'Arabī 's Influence in the Subcontinent," *The Muslim World*, 82-3/4, 1992, p. 221)。インドのイスラーム教徒アフマド・スィルヒンディーが、存在一性論は不完全であると批判する目撃一性論を唱えると、当時の学問の中心地であったアラビア半島にも波及する論争を引き起こすこととなった。

存在一性論は汎神論とも読める側面があるため、インドの多数派を占めるヒンドゥー教徒の世界観との親和性があり、インドにおけるイスラーム思想の受容を促したとも言われている。13世紀以降インドでは、少数派のイスラーム教徒が多数派のヒンドゥー教徒を支配するという体制が約600年続いていたものの、イスラーム政権側からの融和政策もあり、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒は平和的に共存していたとされている。しかし、存在一性論を批判したスィルヒンディーは、イスラーム政権の融和政策についても批判しており、投獄された経験をもつ。スィルヒンディーは、神秘主義としてはナクシュバンディー教団に属していたが、存在一性論を支持するチシュティー教団との宮廷闘争のために、存在一性論を否定したとも言われている (Muzaffar Alam, "The Debate within: A Sufi Critique of Religious Law, Tasawwuf and Politics in Mughal India," *South Asian History and Culture*, 2-2, 2011, pp. 138-159)。以上のように現実の社会や政治にも影響を及ぼしてきた存在一性論であるが、思想的展開の詳細については不明な点があった。

2. 研究の目的

本研究では、インドにおける存在一性論の継承を明らかにすることを目的とした。イスラーム圏の辺境とされてきたインドにおいて、存在一性論がどのように伝えられ、なぜ批判されるに至ったかについて考察すべく、本研究ではスィルヒンディー前後の継承の実態を詳らかにする。存在一性論と目撃一性論を調和したとされるシャー・ワリーウッラーの伝記などに記録されている、存在一性論に関わる師弟関係と教育内容に基づきながら思想書の記述内容の比較を行うことにより、実証性の高い研究の完成を目指した。

存在一性論はイブン・アラビーによって唱えられたが、注釈書によって理論が整理され、受け継がれていった思想である。スィルヒンディーがどのような注釈書で存在一性論を学んだかを明らかにすることで、スィルヒンディーが存在一性論を批判するに至った経緯について、考察を深めることができる。スィルヒンディーの存在一性論批判の背景に宮廷闘争があったとする先行研究もあるが、社会背景も考察に含めるのであれば、インドにおける存在一性論の継承の在り方からも考察すべき問題であると考えた。

これまで研究代表者はイスラーム神秘主義の靈魂論の研究に取り組んできたが、直接師弟関係が結ばれていても、師弟間の靈魂論の差異が非常に大きいことが判明している。たとえばワリーウッラーは、ある著作において、鉱物から人間へと7段階で高まっていくアリストテレス的な靈魂論を述べている。一方、別の著作では、実父でもある師アブドゥッラヒームから、靈魂の内側に次の段階の靈魂があるという入れ子状の6段階の靈魂論を教わったと記している。さらに、もうひとつの著作によれば、父アブドゥッラヒームの師であったホージャ・フルドは11段階の靈魂の段階を想定していた。ホージャ・フルドの実父であり師でもあったパーキー・ピッラーの靈魂論は7段階であったとされており、パーキー・ピッラーの弟子であったスィルヒンディーは、身体と対応した7段階の靈魂を想定していたとされる。なお、スィルヒンディーの孫弟子のアブドゥッラーからスィルヒンディーの思想を学んだワリーウッラーは、ある著作において、スィルヒンディーの靈魂論を6段階と紹介している。親子という近しい血縁関係とも重なる直接的な師弟関係においても、「師弟間で思想が完全な形では継承されていない」とことの実例といえるだろう。

存在一性論の継承も、パーキー・ピッラーに始まるこの師弟関係に沿って行われたと考えられる。靈魂論の継承と同様に、存在一性論も師弟間での思想の変化がみられることが予想される。その変化を原典から読み取ることにより、スィルヒンディーが存在一性論批判に至った過程と、ワリーウッラーが再び目撃一性論を存在一性論と調和させようとした理由の手掛かりがえられると考えた。さらには、存在一性論の継承という事例を通じて、「思想が継承されるとはどういうことか」という一般的な問いへの答えに迫りたい。弟子が師匠の思想を批判的に継承することは珍しいことではない。その場合においても、師の教えに物理的に接触したか否か、師の用語をどれほど受け継いでいるかなど、数値化可能な部分がある。病原菌の感染経路が予想できるように、思想継承についても経路を予想できるようにすることで、著作の記述のみに基づく思想研究の一部にみられる、時代や地域を超えた安易な比較を防ぎ、実証性ある研究手法を確立することを目標としている。

3. 研究の方法

当初の予定では、物理的に可能な思想継承経路を確定した後、師弟間の思想内容の異同を比較する予定であった。先行研究の分類によれば、存在一性論を継承してきた「イブン・アラビー学派」とは、(1)イブン・アラビーの直弟子とその周辺人物、(2)イブン・アラビーの著書の注釈者、(3)イブン・アラビーの師弟関係に連なる人物、(4)イブン・アラビーに知的影響を受けた人物、の4つに分けられる。しかし、存在一性論は知識人の必須の教養であったため、(4)には主要な思想家がほぼ全員該当する。また、知的影響の判断基準や、イブン・アラビーの著作を読んでいない存在一性論者の扱いなどの点で、定義の不明確さが残る。これらの不明確さを克服して研究の実証性を高めるため、デジタルヒューマニティーズの研究手法を取り入れることにした。

第一段階として、フリーウッターの伝記などから師弟関係を確認し、データベースを作成する。師弟関係の根拠となるテキストをデジタル化し、テキストマイニングなどに利用できるデータを構築する。また、Gephiなどの専用ソフトを用いて師弟関係を視覚化する。第二段階として、フリーウッターやシルヒンディーなどのインドにおける存在一性論の継承に関わる思想家たちの著作を分析する。存在一性論についての記述が、師弟関係から推測される解釈に沿ったものであるかを確認し、師弟関係に沿わない解釈があればその原因を追究する。イブン・アラビーに連なる師弟関係の遠近、イブン・アラビーの著作やその注釈書の学習経験、存在一性論に特有の用語の使用頻度やその使用方法などを数値化する。それらの指標と原典分析を組み合わせることにより、思想の継承を実証しようとした。

しかし、コロナ禍によって海外での文献調査を行うことができず、必要な資料が収集できなくなった。そこで第二段階の思想の比較については行わず、伝記資料に研究対象を絞ることにした。伝記資料の記述によって裏付けができる師弟関係の系譜についてデータベースを作成し、データを可視化して分析する方法を確立することにした。また、第一段階のデジタル化やテキストマイニングについても、アラビア文字を含むテキストを対象に行う技術については特に開発途上であったため、研究期間を通じて最新の手法を試行することとなった。

4. 研究成果

コロナ禍において蔵書のオンライン公開が進んだとはいえ、本研究で使用を予定していた文献はオンラインでは入手できなかった。そのため、インドにおける存在一性論の継承の解明という当初の目的の達成については、今後も研究を継続する必要がある。しかし、イスラーム研究における情報学の活用という点においては、予想以上の成果を挙げる事ができた。師弟関係などのネットワークや、師を求めて旅する際の移動経路の可視化について、Gephi(<https://gephi.org/>)やPalladio(<https://hdlab.stanford.edu/palladio/>)といった可視化ソフトやRDF(Resource Description Framework)を用いた手法を検討し、他の研究にも応用できるようマニュアルも作成した。さらに、アラビア文字を含むテキストデータの作成方法についても基本的手法を確立した。テキストデータの作成に必要なOCR(光学的文字認識)や、人文科学テキストデータ構築の標準であるTEI(Text Encoding Initiative, <https://tei-c.org/>)は、欧米が中心となって開発を進めてきたため、アラビア文字を含む右から左向きのテキストに対しては、これらの技術をそのまま利用することができないことがある。このような課題を解決するため、機械学習を用いたアラビア語の自然言語処理についても取り組むようになり、編著書の出版や国際学会での発表という成果へとつながった。今後は、アラビア語のテキストデータから人名などの固有表現を抽出する研究を進め、大量のデータから師弟関係を取り出して分析することを目指す。

主な研究成果について、以下に詳細を述べる。GephiやPalladioによるネットワークの可視化については、2020年度以降に毎年デジタル化技術研究会を開催し、実習形式の講習会の講師などを務めた。地域を超えた師弟関係のネットワークや、学者たちの移動経路を地図上に表示するために作成したデータについては、地図の利用規約により公開できない。RDFを用いたインドにおける存在一性論をめぐる師弟関係については、データベースを作成し、検索方法をウェブサイト

に公開した(https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/149147/a9900ed98ccac65da66874fed8b29c76?frame_id=721197)。

アラビア文字を含むテキストのデータ化については、Transkribus(<https://readcoop.eu/transkribus/>)を利用し、アラビア語テキストを読み取るための言語モデルを新しく作成した。また、TEIに沿って人名部分にタグ付けしたアラビア語のテキストを教師データとして学習させることで、アラビア語テキストのPDF画像から、テキストの人名部分がマークアップされたテキストを出力する方法を試み、日本デジタルヒューマニティーズ学会において発表した(“Picking out Arabian Names from Fahrāsa by Jaʿfar b. Idrīs al-Kattānī without Reading Arabic”)。また、この研究成果について執筆した一章を含む、TEIによるテキストデータ構築方法についての入門書を共同で編集し、出版した(『人文科学のためのテキストデータ構築入門』)。本書により、デジタルアーカイブ学会第4回学会賞学術賞(著書)を受賞した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石田友梨	4. 巻 32
2. 論文標題 「イスラーム×デジタル」教材の開発と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 情報知識学会誌	6. 最初と最後の頁 420～423
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2964/jsik_2022_039	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 石田友梨
2. 発表標題 イスラーム神秘主義をめぐる文献と疑義と人文情報学
3. 学会等名 大阪経済法科大学経法学会教養部会 2018年度第2回定例研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田友梨
2. 発表標題 イスラーム神秘主義の靈魂論とDigital Humanities
3. 学会等名 岡山大学第9回サイバーフィジカル情報応用研究コア（Cypher）研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuri Ishida, Kensuke Baba
2. 発表標題 Picking out Arabian Names from Fahrassa by Jaafar b. Idris al-Kattani without Reading Arabic
3. 学会等名 The 11th Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石田友梨
2. 発表標題 イブン・アラビー『叡智の台座』とその注釈書に対するテキスト計量分析
3. 学会等名 情報処理学会第129回人文科学とコンピュータ研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuri Ishida, Kensuke Baba, Takahiro Baba
2. 発表標題 Named Entity Recognition in Pre-modern Arabic Biographical Texts
3. 学会等名 The Annual Alliance of Digital Humanities Organizations (ADHO) Digital Humanities Conference 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 一般財団法人人文情報学研究所、石田 友梨、大向 一輝、小風 綾乃、永崎 研宣、宮川 創、渡邊 要一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 424
3. 書名 人文学のためのテキストデータ構築入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>1. イスラーム研究用デジタルヒューマニティーズ：アラビア文字テキストのための TEI XML (イベントレポート) https://w.bme.jp/bm/p/bn/htmlpreview.php?i=dhm&no=all&m=38&h=true</p> <p>2. A Study on the Accuracy of Low-cost User-friendly OCR Systems for Arabic: Part 1 (共著) https://digitalorientalist.com/2021/09/17/a-study-on-the-accuracy-of-low-cost-user-friendly-ocr-systems-for-arabic-part-1/</p> <p>3. A Study on the Accuracy of Low-cost User-friendly OCR Systems for Arabic: Part 2 (共著) https://digitalorientalist.com/2021/09/24/a-study-on-the-accuracy-of-low-cost-user-friendly-ocr-systems-for-arabic-part-2/</p> <p>4. 10段階で分かるTranskribus (共訳) https://connectivity.aa-ken.jp/newsletter/588/</p> <p>5. 第4章 デフォルトのテキスト構造 (共訳) https://www.dh.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/?p=978</p> <p>6. indian-akbarian-network-alpha-version https://dydra.com/ishidayuri/indian-akbarian-network-alpha-version</p> <p>7. SPARQL Endpoint for the Indian Akbarian Network https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/149147/a9900ed98ccac65da66874fed8b29c76?frame_id=721197</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------